

# 山の湯雑記

折口信夫

青空文庫



山の蝶<sup>スガル</sup>の巢より出で入 道の上 立ちどまりつつる ひそ  
かなりけり

前に来たのは、ことしの五月廿日、板谷<sup>イタヤ</sup>を越えて米沢へ出ると、  
町は桜の花盛りであった。それほど雪解けの遅れた年である。高  
湯へ行きたいのだと雇いかけて見ても、どの家でも、自動車を出  
そうとは言わない。もう半月もせなければ、船阪峠から向うが開  
きますまいなどと、皆平気でとり合おうともしない。そのうち一  
軒、警察電話で、白布<sup>シラフ</sup>の宿へ問うて見ようと言う家が出来た。

二三个処、道へ雪のおし出して居る所はあるが、大体は谷へ落し

てしまったから、大丈夫這入つて来られるだろうとの返事があつた。それでやつと、すこつぷした男が助手に乗りこんで、山へ入り込んだ事であつた。でも無事に、東屋ヒガシヤと言ふのに著いた。それからふた月、七月の七日に、またやつて来た白布高湯シラブタカユは、もうすっかり夏になつて居る。どの家のどの部屋もあらかた人が這入つて居て、どんな時でも、縦横に通つた廊下の、どこかに人の音がして居た。

居ついて十日にもなると、湯に入る度数もきまつて来て、日に四度が、やつとと言うことになつた。来た当座は、起きれば湯、飯がすんで湯、読み疲れたと言つては湯。こんな風にして、寝しなに這入る湯まで、日に幾度這入つたか知れない。冷える湯のせい

で、あまり湯疲れを感じなかつたからだろう。

一時が廻ると、西側の縁から日がさしこんで来る。山の日は暑いけれど、ほとりを伴うて居ないから、じつとして居れば、居られない程ではない。が、三時半にかつきりと、前山の外輪にそれが隠れて、直射は来なくなる。それまではきつと出あるく事にして居た。

古くから聞えて居る最上モガミの高湯と、山は隔てて居るが、岩代の国の信夫シノブの高湯と、それに此白布と、五里ほどの間に、三つの高湯がある。峡間ハザマの湯でなくて、多少見晴しが利く位置にあるからの称えである。

白布の高湯は、少し前がつまって居るが、其でも、両方から出た

端山間に、遠い朝日嶽など言う山の見える日が多い。見渡しの纏つて居て、懐しい感じのするのは、何と言つても、信夫の高湯だろう。だが、米沢・新庄・鶴岡などの駅々で見た、宣伝びらでは、今年には信夫の湯に力を入れて評判を立てたようだから、定めてあの山の上の数軒しかない古い湯宿が、立てこんだことだろう。作事小屋・物置部屋などに、頼んで泊めて貰つた客などもあるであらうと思う。

最上の高湯は、何にしても、人がこみ過ぎる。出羽奥州の人たちは、湯を娛しむと言うより、年中行事として、尠くとも一週間なり、半月なり、温泉場で暮すと言う風を守っている。そうした村々から、女房たちや若い衆が、大きな荷物を背負つて、山を越え

て来る。最上の湯は、其ばかりか、温泉その物が、利きそうな気をさせる。其ほど峻烈に膚に沁む。東北には酸川スカワ・酸个湯スなど、舌に酸っぱいことを意味する名の湯が、大分あるが、我々の近代の用語例からすれば、酸いと言うより、渋いに偏った味である。最上高湯は、狭い山の湯村に驚くばかりの人数が入りこんで居る。宿と宿とが、二階の縁から縁へ跨ぎ越えられるほどに建て詰んでいる。其で居て、何だか茫漠とした感じのあるのが、よさと謂える湯治場である。

昼貌の花 今日ひと日萎れねば、山の雨アマケ気に 汗かきて居り

最上の湯でのものだったと思うが、歌の方が却て、少し鄙びた感じを出し過ぎて居るようで、よくない。ひよつとすると、蔵王の山を一つ隔てた向う側の青根温泉で出来たものかも知れない。創作動機など言うものは、瞬間に通り過ぎるもので、こんな部分までも、記憶に残らないことがあるものである。

蔵王山の行者が、峰の精進シヨウジをすましての第一の下立オリタちが、此高湯だとすれば、麓の解禁場トシミバが上ノ山カミに当るわけである。其ほど繁昌して居て、亦年久しい湯治場だろうのに、未だに新開地らしい所がある。青い芝山の間、白い砂地があつて、そこが材料置場になつたりして居る。思いがけない町裏から三味線の音が聞えて来たりする。

其処から西へ向けて、米沢海道を自動車でも、又道に沿うて居る奥羽本線の汽車からでも、ほんの一丁場と言ったところに、赤湯の湯場がある。青田の中で、ちよつとした岩山の裾によつた処である。上ノ山をもう一層鄙びた風にした様なところで、湯村を離れて海道を歩いて見ると、飛びとびの村家の姿が、風情深く見られた。其処から又一丁場西へ来て、米沢である。白布との間が、自動車でせいぜい五十分しかかからないので、ついつい山をおりて、米沢へ出ることが多かつた。

暑き日のたまさか 山をおり来たり、町場に入れば 疲れつ  
つあり

百貨店のない都会は、何となく落ちついている。購買力を誇張しないだけでも、町びとの暮しが何となくしつとりした素朴を保つて行くことが出来るのであろう。

半月ほどにしかならないが、やっと前に開通したばかりの鉄道線が、越後へ通つて居る。米阪線と言うので、名は何だか小商人コアキンドの屋号のようである。私はほんの此少し前に、此汽車で越後境へ這入つて見た。新潟県へ這入つて、小国オグニと金丸カナマルとの間を、まだ汽車が通わないで居た。

鷹の巣と言う山の下にある温泉へ行こうと思つて行つたのである。去年の秋の末、鉄道が通つたばかりの小国の村は、其でも終著駅

らしい様子を、駅前運送店や、飲食店に見せて居た。だが此も、もうここ半月位で、多くの客の素通りして行く静かな山間の宿場に還るのだと思うと、内容は違うけれど、田山さんの作物にあつた「再び草の野に」と言う表題が、胸を掠めた。小綺麗な料理屋の二階から川を見おろす座敷に通つて、鮎を焼かせようとしたが、まだ解禁にならないと言う。多くの平野の川々では、やがて復禁りよの時期に入ろうとして居るのに、山の中ではまだ鮎が小さ過ぎると言つて居る。旅行した先々で鮎を頼んで見ると、十月末になつて、さび尽してもまだ禁猟にならない処もあり、禁猟など言うことが、鮎にあることすら知らぬ地方もある。中食の払いをして見ると、普通こう言う町でとる値段の倍以上もつけておこし

たようである。此も後半月、汽車の通過するようになる時までだ  
ろうと思うと、おかしくなつて来た。

越後エチゴカナマル金丸・越後エチゴカタガイ片貝など言う新駅も、出来たばかりで、まだ  
人影もなく、深い山の中に真白に静まり返つて居た。其等の前を  
自動車は通つて、あてにして来た温泉場へ著いた。

秋の末になると閉めて帰り、春深く雪どけの頃、宿主は戻つて来  
ると言つた。信州の佐久の奥からやつて来るのだと言う。そう言  
えば、此辺の景色が、千曲川の上流と何処か似て感ぜられる。景  
色のとり入れ方はむやみによいが、川の砂や石、第一、岩壁の色  
が、如何にも美しくない。其が味を薄くしている。ここで一晚と  
まった。村上あたりの中等学校の生徒だろう。五六人来て、宿の

庭の岩陰に、てんとを張つて居る。数年前から旅行すると、よくこうしたきやんぷ連中に出あう。

荒川と言う其流れについて下つて、高瀬とか言つた宿屋数軒、外湯一棟と言う処も見て、湯沢温泉へ出た。そこで一軒、山の流れの行きどまりになつたところの両側に跨つて建つて居る家に休んで、越後<sup>エチゴシモゼキ</sup>下関駅発の汽車の時間を待ち合せた。規模は小さいが、川の砂を掘り窪めて、村の子どもが泥の浴槽を造つたりしている遊び場が、鼻の先にあつた。湯の量も相当にあるだろうのに、元湯の一棟を数室にしきつた家族風呂を建てて居た。こう言うのをすくのが、此頃の客人気質かも知れぬが、宿屋の為に気の毒な気がした。

下関の村は、ツキロクサイ月六齋ツキロクサイの市日の一つに当る日で、賑うて居た。軒並び覗いて見ても、隅々までも都会化した品物ばかりが並んでいる。目につく物は、凡てぶりき物が骨董並みに考えられる訣だと思ふ。もう山もここまで来ると、余程開けて、阪町までは、一続きと言う気がする。

ことしはどう言う訣か、何処へ行つて尋ねても、山は岩魚のとれない処が多かつた。やまめや、かじかすらあまり喰わしてくれぬ処がなかつた。白布も高湯まで来ると、川が細つて居るが、それでも岩魚は、始中終とれて来た。尤、稀に大きいのがついて来るのを、「此川のですか」と問うと、きつと外ワキ処の川から来たものだとの答えであつた。小形コブリだけれど、ころもを掛けて揚げたりし

たのは、却てよかつた。湯場から一里もさがると、オオシラブ 大白部・小  
シラブ 白部など言う村があつて、水の手がよいと見えて、谷から可なり  
高い処に、田地が多く作られて居る。稲は相当に伸びているのに、  
苗代田はまだ水を張つたまま、豆も作らずにある。豆で思い出す  
が、此畠を荒すと謂われている郭公が、まだ時季は過ぎシユンないのに、  
初めから鳴いた事がない。此辺の山間に居ないのか知ら。  
時鳥は、其も時々だが、宿の前の右に山を負うた杉林の中で極つ  
て鳴く。忍び音と言うやつで、非常に声が小さく、節が細かく聞き  
なされる。鶯ばかり居て、其外は、何の鳥も鳴かぬような山であ  
る。其ももう今になると、谷渡りなどは、あまり高音を揚げるこ  
とが出来なくなつてゐる様だ。山の傾斜ナツエや、少々坦らになつたと

ころなどは、大抵、篤竹が深く茂つて居る。そんな中に籠つて鳴いて居るのは、何処へ行つても、鶯の癖と見える。山へ来た当座は、毎日篤竹の筍が膳タケノコについて来た。其中出なくなつた。聞いて見ると、もう長け過ぎタて齒に合わなくなつたのだと言う。山では、昔から此地竹の筍を喰べて居たのに不思議はない。其が罐詰になつて町場へ出るようになったのは、まだ十年にもならないことである。荒年続きで苦しんだ東北の農村で考え出したと言う新聞記事すら、まだつい此頃見た事のような気がする。

耳近く鳴く鶯は 篤のなか 青き躑躅ツツジの 時に立ち居る

おほらかに 人のことばの思ほえて、山をあるくに いきど

ほりなし

地竹に縁があるのもおかしいが、やっぱり今年は、度々これを喰べた。七月の五日、鶴岡の町であつた先師三矢重松先生の歌碑の除幕式に出掛けて、其後ずっと出羽の山々を歩いて居た訣だが、あの次の六日の日は、羽黒山頂上の齋院で泊つた。友人なる山の宮司が肝をいってくれて、夕饗ユウゲは二の膳ガッサンダケに到るまで、一切山の物ばかりであつた。其中では、やっぱり月山筍ガッサンダケが一番印象している。おなじ地竹と言っても、羽後の三山に亘つて生える筍は、唯の篤竹のよりは肥えている。鶴岡の市場へ行つて見たら、此が沢山出て居た。ちよつと見には、茗荷の長いのの様な感じがして居

た。そうした舌の記憶を思い起すような事があるのは、誰もある事である。山や野の長い道の中で此追憶の来る時は、やるせないものだ。と言うことは旅をする者だけが知っている。そう言う道を通つて、二十町も登ると、高湯とは別な湯元がある。小さな湧き場だが、お釜と言つて、三山の湯殿山を思わせる様な恰好で、温泉が岩伝いに落ちて居る。此湯は、里人が神聖がつて居たのだけれど、やはり白部の村人が、これを引いて湯宿を開いている。お釜の二町程下に、二階屋のあぶなく立つて居るのが其だ。新高湯と言う。高湯から歩いて登るのにちょうど頃合いなので、三度もやって行つた。宿の女年よりと知り合いになつて、色々な山の菜を出して貰つた。漬け物部屋までついて行つて、説明を聞いた

りしたものである。あいこ・どほな・みずぶき・ごうわらび・ほときまだ色々試して見たが、多くは忘れた。其中、ごうわらびと  
言うのが、異様に歯や舌に触れた。どほなと言うのは私がすきで、  
信州の山中から時々とり寄せているうとうぶきと同じ物であつた。  
山の菜としては、うとうぶきがやはり、本格的な薫りと、味いと  
を持って居ると言うものだろう。柳田國男先生にお裾わけしたと  
ころが、先生も忽、うとうぶきの愛好者になつておいになつた。

夕深く 山の自動車は 山鳥の道に遊ぶを 轢き殺さむとす

旅に出る前、私は斎藤茂吉さんに逢つた。出羽の温泉の優れた処

を教えて下さいと言ったところ、白布の外は肱折ヒジオリだなあと話された。私は、雄勝・院内を越えて、秋田県の鷹の湯に一夜、引き還して新庄から肱折に這入つて一晩を泊りに出かけても見た。やつぱり肱折はよかつた。新庄からあんなに奥へ這入つて行つて、ああ言うがつしりした湯の町があるとは思わなかつた。どの家も大きな真言の仏壇を据えて、大黒柱をびかびかさせて居ようと謂つた処である。湯を呑んだ味は、今まで多く歩いた諸国の温泉の中では、一番旨いと思つた。一つは、私の味覚に最叶う炭酸泉の量が多いからであろうと思う。が、其ほかにも、かわつたものを含んでいるようである。私は此湯場を中心にした色々な湧き場を歩いて見た。ここは標高はわりに低いから、真夏の今頃よりは、

もつと涼風立つて、農村の忙しくなった時分に、静かに入湯に來たいものと考ええる。

をみなごの立ち居するどし。山の子に　よきこと言ひて　人は聞かさず

八月の中頃になって、ちつとでも東京に近寄つて居ようと言う気が動いたのであろう。つい栃木県まで引き還して來た。そうして今は、奥那須の大丸塚に居る。傾斜の激しい長い沢が、高い処から落ちて來て、ここで急に緩くなって居る。そうした、両側の巖の間から湯が流れて、湯川になっている。旧曆の七夕の星空もこ

こで見た。八月の九日月も、川湯に浸って眺めた。やがて、此月が円かになるまでは、ここに居ようと思つて居る。

東京に歸らむと思ふ　ひたごころ。山萩原に地伝ふ風音

# 青空文庫情報

底本：「日本の名随筆10 山」作品社

1983（昭和58）年6月25日第1刷発行

1998（平成10）年8月10日第26刷発行

底本の親本：「折口信夫全集 第廿八巻」中央公論社

1968（昭和43）年2月初版発行

※底本で、「先生も忽、うとうぶ」に「#」「、うとうぶ」に傍点「き  
の」となっていたところは、底本の親本を参照して、「先生も忽、  
うとうぶき」に「#」「うとうぶき」に傍点「の」に改めました。

入力：門田裕志

校正：多羅尾伴内

2003年12月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 山の湯雑記

折口信夫

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>